

## 2. 地形・地質

### 2-1 地形概要

岐阜市は美濃山地と濃尾平野の境に位置しており、市域の東部から北部には美濃山地の南縁部にあたる丘陵および低山となり、南部から西部は濃尾平野の北縁部にあたる平野(平野、段丘、扇状地)よりなる。美濃地域は濃尾平野と同様に傾動地塊<sup>1</sup>を形成し、東が隆起、西が沈降するという地殻の上下運動を受けている。岐阜市付近は、隆起した山地と、沈降による地盤の低下ならびに河川侵食と堆積によって形成された平野部の境界部となっている。

山地は、標高 417.9m の百々ヶ峰を最高峰として、岐阜市北部から各務原市にかけて西北西～東南東へ低山であるが険しい山地が連なっている。また南東部の平野部の中にも、小規模な残丘状の山体が分布する。こうした山地の配列は基盤地質の構造を反映したもので、坂祝向斜<sup>2</sup>と呼ばれている。岐阜市付近の山地は主に中生代ジュラ紀の砂岩や泥岩、チャート(説明は後述)からできているが、砂岩とチャートでは岩石の硬さや風化のされやすさが異なる。そのため、浸食されやすい砂岩層が山間の低地や低山を、硬くて浸食に強いチャートが高い峰を形づくっている。こうした地質の違いを反映した地形を「組織地形」という。金華山をはじめ、百々ヶ峰など岐阜市の山々が、低山地域でありながら急峻な地形となっているのは侵食されにくいチャートでできているためである。

一方、平野部は、長良川・木曾川などが美濃山地を侵食し、運搬してきた砂礫が堆積して形成されたものである。岐阜市では、金華山付近で長良川が美濃山地から平野部へ出る。ここには金華山付近を扇頂とする扇状地が形成されている。岐阜市の旧市街地はこの扇状地の上にあるため、旧市街地よりも長良川の方が高い位置を流れる「天井川」となっている。扇状地よりも下流側は氾濫原<sup>3</sup>となり、水田が広く分布する地域となっているが、都市化がみられる。この氾濫原も平坦でなく、旧河道と自然堤防<sup>4</sup>、後背湿地<sup>5</sup>などの微地形がある。

岐阜市周辺の衛星画像を図 2-1 に示す。

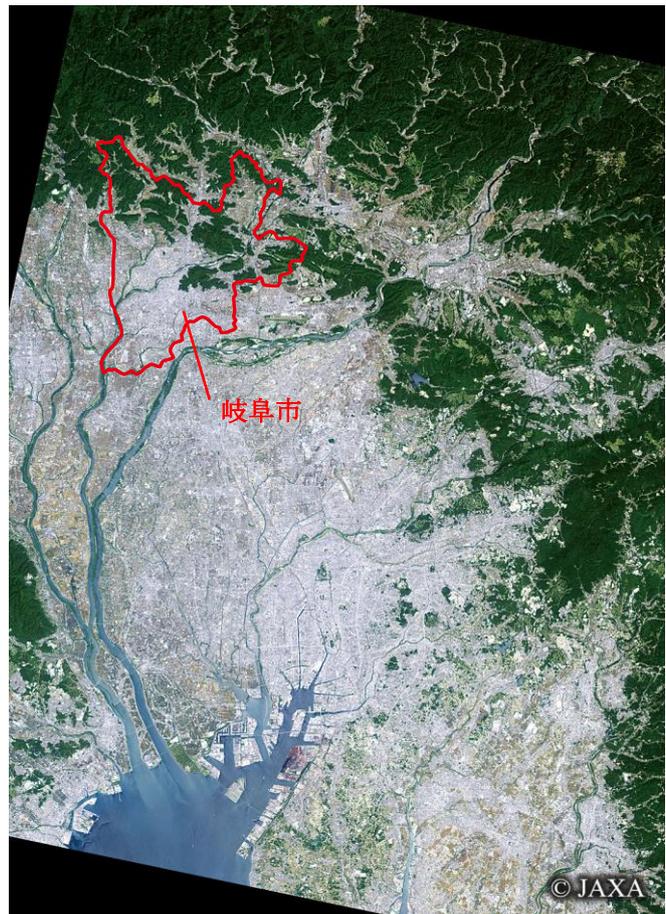


図 2-1 岐阜市周辺の衛星画像

<sup>1</sup> 傾動地塊：断層運動によってできる地形。断層運動によって片側の岩盤が傾斜するように変形してできる。濃尾平野では、養老断層の運動によって、山地が隆起し、平野が沈降しているが、沈降量は断層に近い西部ほど大きい。このため濃尾平野の地下の地層は西に傾斜しており、東から西に向かうにつれて深度が大きくなっている。

<sup>2</sup> 向斜：地層が褶曲を受けてできる構造。地層が曲がって下にたわんだ部分が向斜。向斜軸から両側に地層が盛り上がっている。逆に、地層が上にたわんだ部分が背斜。背斜軸から両側に向かって、地層は傾斜して深くなっていく。

<sup>3</sup> 氾濫原：河川の増水時に、水があふれて一時的に水没する部分。扇状地や三角州にできる。河川の氾濫が繰り返されると、河川の流路が変化し、網目状になることがある。こうした河川は網状河川という。網状河川では氾濫原は広く、三角州のかんりの部分を占めることがある。

<sup>4</sup> 自然堤防：氾濫原において、河川の流路の両側にできる地形的な高まり。河川から運ばれてきた土砂によって自然に形成された土手。

<sup>5</sup> 後背湿地：三角州などの沖積平野の低地に発達した湿地。自然堤防において河川の反対側にできる。

## 2-2 地質概要

### 2-2-1 美濃地域の地質の成り立ち

岐阜県高山市以南は美濃帯という地質区分に属している。美濃帯を構成する岩石は、緑色岩(玄武岩)、石灰岩、チャート、珪質頁岩、泥岩、砂岩など多様で、これらをまとめて美濃帯堆積岩類と呼んでいる。

美濃帯の岩石は、海洋底の堆積物がプレートの移動とともに移動し、大陸の縁にくっついた(付加)ものである。古生代石炭紀からペルム紀に、海洋プレートが海嶺で形成され、玄武岩からなる海洋底や海山ができた。海山の上にはサンゴ礁ができ、やがて石灰岩となった。大垣市赤坂の金生山や山県市の舟伏山、本巣市の西山などの石灰岩はこうして形成された。

深海底には、玄武岩質地殻の上に主に放射虫(図 2-2 参照)という珪酸(SiO<sub>2</sub>)の殻をもつプランクトンの遺骸や海綿の骨針が堆積した。これが固結した岩石がチャートである。

チャートの堆積した時期は、およそ古生代ペルム紀末から中生代ジュラ紀前期(約 2 億 9 千万年~2 億年前)までで、堆積した場所は赤道付近の南半球であることが分かっている。プレートが移動し大陸に近づいてくると、陸からの堆積物が地層をつくるようになる。大陸の沖合では泥岩が、海溝付近では砂岩と泥岩が堆積した。砂岩と泥岩が繰り返し堆積した地層は、大陸棚に堆積した土砂が、地震などの際に海底で地滑りを起こし、より深い海溝部へ流れ込んでできたものと考えられている。

このように海洋プレートが形成され、移動してくる間に、海洋底には下から玄武岩(一部石灰岩を含む)、チャート、珪質泥岩、泥岩、砂岩と重なる地層が形成された。こうした地層の積み重なりは海洋プレート層序と呼ばれている。海洋プレートが海溝部で大陸プレートの下に潜り込む際、これらの堆積物は海洋プレートからはぎ取られるようにして、大陸の縁に付加した。海洋プレート層序を構成する堆積物はプレートの沈み込みにもなって次々とやってきて陸側プレートに付加するため、これらは断層によって切断されたり、付加の際に激しい褶曲を受けるため、地質構造はきわめて複雑なことから、付加コンプレックスと呼ばれることもある。このため、美濃帯にはそれぞれ、時代や形成場所の異なる岩石が複雑に分布するようになった。

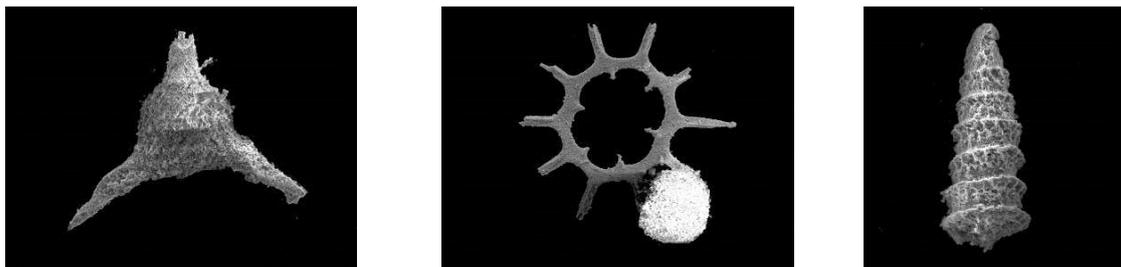


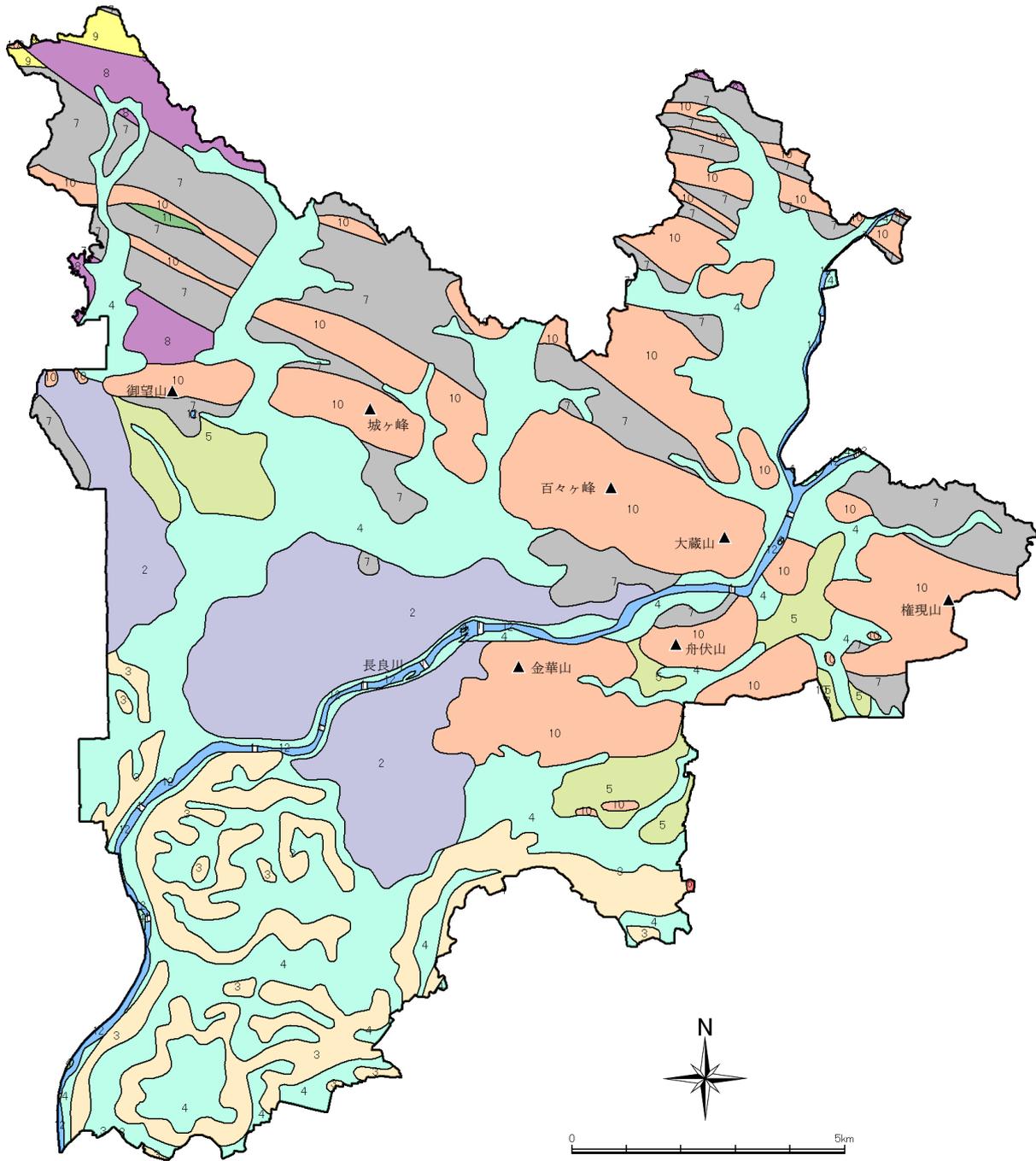
図 2-2 放射虫の仲間

### 2-2-2 地質概要

岐阜市の山地は、美濃帯堆積岩類の内、古生代ペルム紀~中生代ジュラ紀までに海洋に堆積した砂岩や泥岩、チャートから形成されている。砂岩・泥岩・チャートは主に東西方向につながるように分布し、南北方向にはこれらの岩石が繰り返すように分布している。

一方、平野部の台地や低地は、一部長良川の扇状地などでは、新生代第四紀更新世(約 260 万年前)の砂礫層を含むが、主に新生代第四紀完新世(約 1 万 2 千年前)の砂礫層からなっている。岐阜市の地質図は図 2-3 に示すとおりである。

岐阜市には濃尾地震を起こした根尾谷断層系に含まれる梅原断層や三田洞断層などの活断層が存在する。



凡 例

- |   |              |    |           |
|---|--------------|----|-----------|
| 1 | 人工改変地        | 7  | 美濃帯砂岩層    |
| 2 | 扇状地堆積岩類      | 8  | 美濃帯砂岩泥岩互層 |
| 3 | 自然堤防堆積岩類     | 9  | 美濃帯基質     |
| 4 | 海成または非海成堆積岩類 | 10 | 美濃帯チャート   |
| 5 | 低位段丘堆積物      | 11 | 美濃帯玄武岩    |
| 6 | 高位段丘堆積物      | 12 | 水域        |

資料：産業技術総合研究所地質調査総合センター(編) (2012) 20万分の1日本シームレス地質図データベース(2012年7月3日版).  
産業技術総合研究所研究情報公開データベース DB084, 産業技術総合研究所地質調査総合センター.

図 2-3 地質図

## 2-3 地形・地質の特徴

### 2-3-1 組織地形

岐阜市付近は海洋底に堆積した美濃帯堆積岩類の内、チャートから珪質泥岩、泥岩、砂岩の地層が繰り返すように地層が分布している。

各務原市から岐阜市に至る地域の地形図や、衛星画像を見ると、西側に開いたV字型の山並みがいくつも重なり、連なっているのが確認できる(図2-4参照)。この山並みにはチャートが、比較的低い山地には砂岩が分布している。チャートは珪酸でできているので、非常に硬く浸食を受けにくい。これに対し、泥岩や砂岩は比較的軟らかく浸食されやすい。そのため、チャートの部分は浸食されずに残り、急峻な峰となっている。このように、岩石の硬さによって浸食を受ける程度が異なるため、地質構造を反映した「組織地形」が形成された。

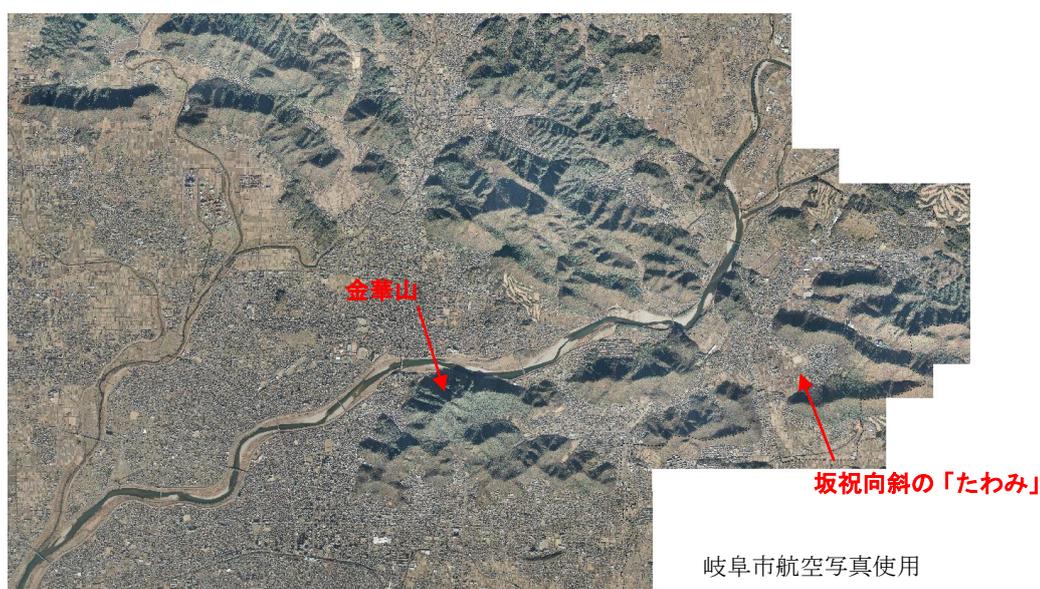


図2-4 岐阜市周辺の組織地形

山並みがV字型になっている理由は、地層の分布にある。海洋底に堆積した地層が付加する際に押し縮められるため、地層が低角の断層で裁たれ、瓦が重なるような構造になったことにより、同じ地層が繰り返すようになった。こうした地層が大きく褶曲運動を受け、岐阜市付近では地層が下向きにたわんだ斜構造(坂祝向斜)となっている。向斜構造は全体で西に傾いているため、犬山市付近が船首となった船底のような構造となっていて、硬いチャートの部分が浸食に耐えて、山並みをつくっている。

岐阜市の御望山はこの坂祝向斜の西縁部に位置し、山地ではジュラ紀のチャート層が分布し、北側と南側の低地は泥岩が分布している。最近の詳細な地質調査によると、北側には三畳紀初期(約2億5千万年前)に特徴的な砥石型珪質泥岩が分布しているが、南側は時代の若い泥岩となっており、地形と地質が対応するという組織地形の特徴を示すことが明らかにされている。

### 2-3-2 金華山のチャートの褶曲と微化石

金華山はチャートからできているため、急峻な地形となっている。チャート層は2~3cm程度のチャートと数mm以下の泥岩層の繰り返しからできていて、層状チャートとよばれる。このチャートは主に0.1mm程度の珪酸質の殻を持つ放散虫というプランクトンの遺骸が積み重なってできたものである。そのため、1mmの厚さが堆積するのに1,000年以上かかったと

考えられる。チャートの色は、赤色のものが多いが、白色や緑色や黒色などさまざまな色のものもある。これは含まれる鉄分の酸化状態の違いを反映している。酸素が多いと赤く、少ないと緑や黒く、鉄分が少なくなると白っぽくなる。

金華山のチャート層は組織地形をつくる大きな褶曲構造(向斜)の一部であるが、さらにチャート層をつくるチャート自体も激しく褶曲している。これは大陸の縁に付加する際に、チャート層が十分に固結していない状態で、強い力で圧縮するような力を受けたためである。また、海洋底に堆積したチャート層は 100m 程と推定されるが、断層によって寸断され、繰り返り重なるようになったため、実際の厚さよりも見かけ上厚い地層となっている。

チャートをフッ化水素で溶かし、内部の放射虫の化石を取り出して電子顕微鏡などで観察すると、そのチャートの堆積した時代を推定することができる。金華山をつくるチャート層は古生代ペルム紀末～中生代三畳紀中期(約 2 億 6 千万～2 億 3 千万年前)の地層である。

金華山ドライブウェイから七曲がり登山道へ至る大堀切には黒色泥岩層が見られる。ここでは、ペルム紀中期～後期の年代を示す放射虫化石が発見されており、古生代ペルム紀末(約 2 億 5 千万年前)に地球規模で大規模な酸素欠乏が起こったとされる。そのため多くの生物が絶滅し、チャート層が堆積しなかった。黒色泥岩層はこうした時期のものだと推定されている。生物大量絶滅の原因としては、海洋酸素欠乏事件のほか、この黒色泥岩には多量の硫黄が含まれていることから、海洋の硫化水素濃度が高まったという説や、黒色泥岩にフラーレン<sup>6</sup>が含まれ、その中に含まれる希ガス同位体比から、大規模な天体衝突事件があったとする説も出され、論争が続いている。このような地球史の出来事を記録した地層は、世界の地質学者の注目を集めている。

### 2-3-3 鏡岩(加野大蔵山)長良川右岸

鏡岩(図 2-5 参照)は県指定天然記念物である。チャート層のような堅硬な岩石が比較的高い圧力で押されて断層として動いたときに、両側の岩石が互いにこすられて磨かれることで作られる。こうした断層によってできる鏡のように光沢のある滑らかな面を「鏡肌(スリッケンサイド)」といい、鏡岩という名もこれによる。ここでは暗緑色のチャートが断層によって切られ、幅 2m 程の谷になっており、その両側の壁が平らに磨かれたようになっている。約 4m 四方に広がっていた鏡肌が 2 ヶ所みられたが、現在はかなり風化して鏡のような光沢面はなくなってきている。鏡肌には断層のずれた方向に条線(筋状の線)が付いている。断層はほぼ垂直で、断層面は概ね東西方向に延びる。

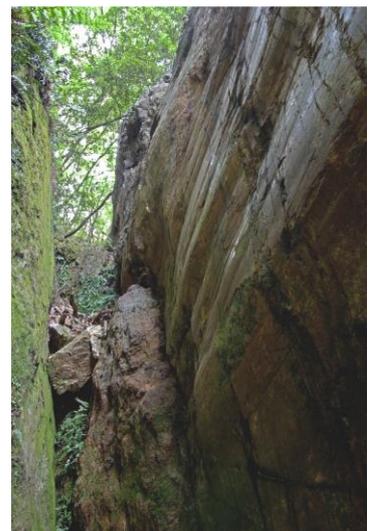


図 2-5 鏡岩(上: 鏡肌面、右: 断層によってできた谷)

撮影: 白尾元理

<sup>6</sup> フラーレン: 炭素原子が 60 個集まって、サッカーボールのような構造をつくった有機分子。中は中空になっている。フラーレンは山火事などでできることが知られているが、隕石孔でも検出されたという報告がある。また、フラーレンの中空部にとりこまれていた希ガスの組成から、フラーレンが宇宙起源であるという説もあり、論争となっている。

## 2-4 平野

### 2-4-1 長良川の扇状地

長良川扇状地は、岐阜市中川原付近を扇頂とする緩扇状地で、扇端は伊自良川の旧河道が長良川に合流していた江口付近にある。半径約 6 km、扇頂標高 25m、扇端標高 10m で標高差約 15m の扇状地となっており、扇状地面の傾斜はほぼ 400 分の 1 となる（「岐阜市史」より）。

扇状地の形成は礫層の厚さや弥生遺跡の存在から、少なくとも縄文時代以前から継続していたことが推定される。

そのほか、小規模な扇状地地形が椿洞、佐野など市北部に数ヶ所みられ、岐阜市の地形の成り立ちに深く関わった要素として重要である。

### 2-4-2 長良川の古流路

岐阜市の旧市街地は扇状地の上にてきた。そのため、長良川の河床の方が市街地よりも高い「天井川」となっている。このことは岐阜市役所前など各所に設置されている長良川水位表示塔などからも分かる。

長良川右岸(北岸)を長良橋から堤防上を 500m ほど下ったところに「長良川上流改修記念碑」がある。岐阜市長良福光から江口までの間は、昭和初期までは、井川(現在の長良川)、長良古川、長良古々川と 3 本の川筋で流れていて、そこには輪中(囲堤：かこいづつみ)が形成されていた。長良古川は早田と則武の間を、長良古々川は則武と鷺山の間を流れ、伊自良川と合流し、鏡島で再び長良川と合流していた。洪水になると長良古川や長良古々川が氾濫し被害を受けたため、昭和 8 年からこれらの川を締め切る工事が始まり昭和 14 年に完成した。現在、長良古川は早田川となっており、元の河川敷には岐阜メモリアルセンター、市立早田小学校や私立伊奈波中学校、県立岐阜北高校、県立岐阜商業高校、市立明郷中学校など教育文化施設が並んでいる。また、長良古々川は正木川となっている(図 2-6 参照)。

古流路の脇には、土地に高まりがあるが、これは自然堤防である。現在では建物が建ち並び、細かな土地の起伏がわかりにくくなったが、古い地形図や航空写真を見ると、集落が曲線を描くように並んでいることが分かる。これは集落が自然堤防に建っているためで、現在でも水害を防ぐために屋敷全体を盛り土した家屋や、敷地の一部を高くして建てられた水屋が見られる。島地区や則武地区は長良古川、長良古々川などと自然堤防によってできた輪中集落である。

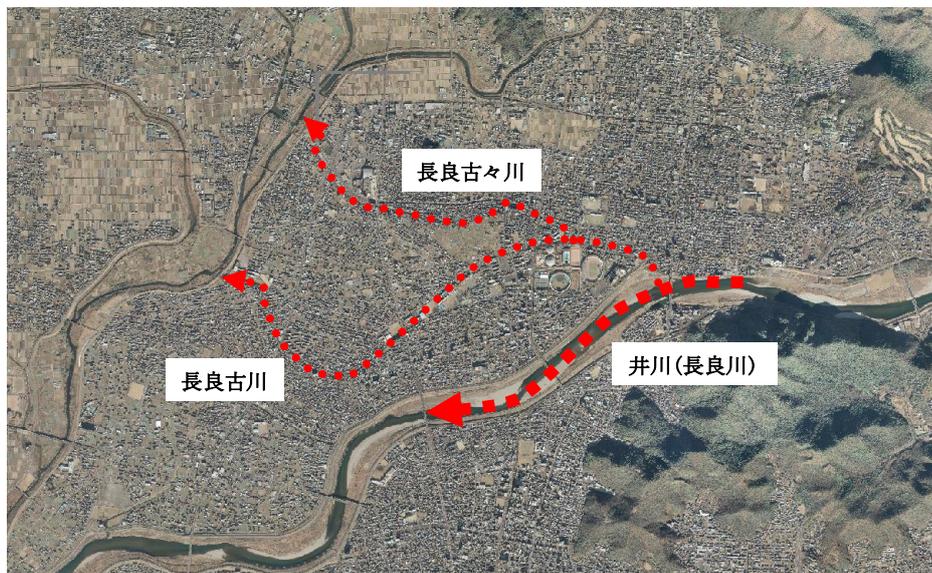


図 2-6 長良古川・古々川の流れ 岐阜市航空写真使用

### 2-4-3 長良川の「天井川」と陸閘

水害を防ぐために堤防を整備して流路を固定すると、河床に土砂が堆積し、次第に河床が高くなる。こうして河床の方が周囲の土地よりも高い「天井川」となる。洪水の際にひとたび堤防が切れると、天井川の周囲や輪中地域は水害に見舞われる。岐阜市の旧市街地よりも長良川の方が高い位置を流れているため、長良橋から忠節橋の堤防が切れると、岐阜市中心部から加納付近までが浸水する。そこで、長良古川などの締め切り工事とともに、長良川左岸には「岐阜特殊堤」が築かれた。

陸閘(りくこう)は堤防の内外の通行ができるように、日常は堤防の一部を切り通し、道路としているが、増水時にはゲートなどにより締め切って堤防内への浸水を防ぐ施設である。長良橋の取り付け道路と堤防では、水があふれ、氾濫をおこした。このため、道路の方が堤防よりも低くなっており、昭和 34 年の伊勢湾台風や翌年の洪水の際に、この箇所から水があふれた。その後大宮、長良の両陸閘が設置され洪水を防ぐようになった。現在この付近には、大小約 30 の陸閘が設けられている。

### 2-4-4 長良川伏流水

長良川扇状地は砂礫層からできているため、地下には長良川の水が伏流水となっていて、豊富な水がある。岐阜市では、金華山麓の鏡岩水源地、雄総水源地など 21 ヶ所の水源があり、長良川や伊自良川の伏流水を取り、利用している。

柳ヶ瀬劇場通りの公園と市内西方の北方町との境にある曾我屋地区の夕辺ヶ池は長良川の伏流水が地上に湧き出した泉である。長良川の扇状地の扇端にあたり、濃尾平野の地下水の帯水層とその流れを推測する上で重要な地点ということができる。

### 2-4-5 根尾川の扇状地と古流路

根尾川扇状地は本巣市山口を扇頂とし、岐阜市西部から本巣市、大野町に広がる。岐阜市では伊自良川から西の黒野、西郷、西改田が根尾川扇状地である。

根尾川はたびたび流路を変え、奈良時代までは現在の犀川、古根尾川が主な流れであった。その後、現在の席田(むしろだ)用水から糸貫川へ至る流れとなった。1530 年の大洪水により、藪川(現在の根尾川)が新しい主流となった。つまり、1530 年までは根尾川は長良川の支流として、本巣市山口から岐阜市西改田へ流れ、曾我屋で伊自良川と合流していた。また、本巣市文殊と船木山の間を流れ板屋川に合流する流れもあった。根尾川の流路が変わって以降、本流であった流路は席田用水として利用され、その下流の西改田から曾我屋に至る流路は古根尾川、あるいは根尾川と呼ばれている。

### 2-4-6 河岸段丘

河岸段丘は、河川の両岸にできる階段状の地形である。土地が隆起または、海面が低下すると、河川の浸食力が増し、それまでの河原を浸食し、より低い位置に新しい河原が形成される。こうしたことが繰り返されると、何段にも発達した河岸段丘ができる。そのため、より高い位置にある河岸段丘ほど古い地形であるといえる。

岐阜市内ではあまり河岸段丘は発達していないが、岩田から長山にかけての長良川左岸に現在の河床面よりも 4m ほど高い小規模な段丘面が見られる。

また、北西部の黒野地区は伊自良川の沖積面から 2~3m 高い台地となっている。そのほか、日野南部や長森地区にも沖積面よりも数 m 高い台地が分布し、これらはいずれも新生代第四紀更新世後期(数万年前)の堆積物からなる。

### 2-4-7 濃尾地震による地滑り災害跡(打越地内)

岐阜市北部常磐小学校区(旧常盤村)打越地内の瑞昌寺墓地および南方の民家と竹林は、明治24年(1891年)10月28日6時28分の濃尾地震の時に、北から南に向かって、数十m以上もの地滑りによって移動した。現在、移動した当時の位置に住宅が建ち、当時の井戸がそのまま使用されている。井戸が移動しても湧水せずに使用可能なことから、地下水をたたえている帯水層が、この地滑りを起こした滑り面である可能性が高い。また、地滑りによって移動した住宅周囲の道路も、住宅の移動した方向に曲がっている。これらは岐阜市内に残る唯一の濃尾地震の被害跡として非常に重要である。

この災害に関する詳しい記述は旧常盤村史に見られるほか、瑞昌寺墓地内の石碑にも刻まれている。また、当時の古文書が城田寺の旧家に保存されている。

## 2-5 活断層

日本列島は、東日本をつくる北米プレートと、西日本をつくるユーラシアプレートの2つの大陸プレートに対し、太平洋プレートが東から、フィリピン海プレートが南からぶつかるようにして接する場所にある(図2-7参照)。日本海溝や駿河トラフ、南海トラフなどの海溝部は、大陸のプレートの下に海洋プレートが沈み込む場所となっている。ここでは、海洋プレートの沈み込みに伴って、大陸のプレートが引きずり込まれるように変形し、これが限界に達すると大陸のプレートが一気に元に戻ろうとしてずれが生じる。これが海溝型地震である。海溝型地震はおよそ100年から150年ほどの周期で発生する。

これに対し、プレート同士のぶつかる力によって、内陸部の岩盤にひずみが溜まり、やがて、岩盤の弱い部分に破壊が生じる。これが断層である。こうした断層が生じると、内陸型地震(直下型地震)となる。活断層とは「極めて近い時代まで地殻運動を繰り返した断層であり、今後もなお活動するべき可能性のある断層」とされている。すなわち、岩盤に一度破壊が起こった部分は、他の岩盤よりも弱いため、再びひずみが溜まってくると、その部分にずれが生じる。こうして活断層は何度も活動を繰り返す中で、地形を変化させている。岩盤の破壊は主に地下で生じるが、大規模な破壊が起こると地表にまで達し、地震断層となる。地形に現れている活断層は大きな地震を起こしたものであるといえる。活断層の活動周期は数千年に一度というもので、活断層の存在が確認されても、次の活動がいつなのかは予測が難しい。

岐阜県には数多くの活断層が分布している。中でも1891年(明治24年)の濃尾地震(M8.0)を起こした根尾谷断層帯と梅原断層帯は岐阜市の近傍にあり、壊滅的な被害をもたらした。

岐阜市周辺の断層帯は図2-8に示すとおりである。

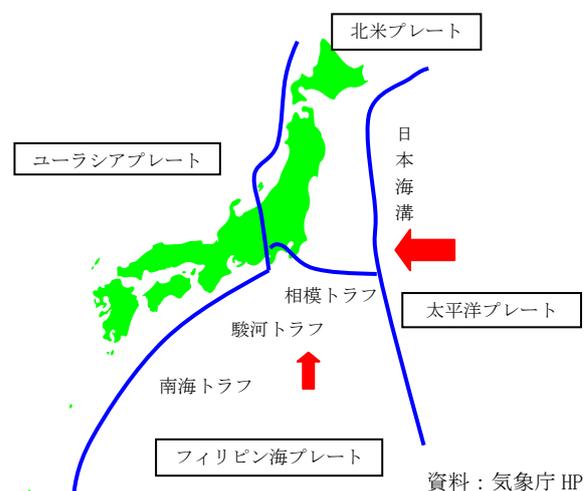


図2-7 日本列島周辺のプレート

### 2-5-1 根尾谷断層帯

根尾谷断層は、能郷白山付近から岐阜市北部まで北西—南東方向に約 40km、確実度<sup>7</sup> I、活動度<sup>8</sup> A~B 級の左横ずれの活断層である(活断層研究会, 1991)。根尾谷断層を中心とした断層群は根尾谷断層系とされ、全体で約 80km におよぶ。この根尾谷断層系の活動により濃尾地震が発生し、本巣市根尾を中心として断層による甚大な被害とさまざまな地形の変位が生じた。

「1/25,000 岐阜県活断層図」(岐阜県, 2010)によれば、岐阜市では根尾谷断層の南東端が北部の雛倉から三田洞にかけて、山県市との市界に沿って伸びている。岐阜市の根尾谷断層は濃尾地震の際には活動をしなかった。

これは岐阜市付近では北側に平行して伸びる梅原断層が活動したためと考えられる。



図 2-8 断層帯分布図

### 2-5-2 梅原断層帯

梅原断層は、濃尾活断層系(松田, 1974)の南東部に位置する西北西—東南東方向へ伸びる約 27km の活断層で、活動度は B 級ないしは C 級とされている(活断層研究会, 1991)。明治 24 年の濃尾地震の際に山県市伊自良から美濃加茂市深田付近までの地震断層が出現した。この断層は南側が隆起する左横ずれ断層であった。

本断層は岐阜市内では北部の北郷・太郎丸を経て、関市千疋に至る約 5km の間を通っている。しかし、この地域は住宅および田畑などの耕作地、道路などになっており、濃尾地震から 120 年ほどたった現在では、地震断層の痕跡を探すことは難しい。

また、隣接する山県市高富の深瀬において、濃尾地震の際に梅原断層の南側が隆起したため、南流する鳥羽川の下流側が高くなり、排水が困難となって滞水域「深瀬の湖」となった。その後、湖水化した鳥羽川の水を排水するために、鳥羽川の河床を高くするとともに、深瀬で合流していた支流は新たに排水溝(新川)として鳥羽川の下をくぐる立体交差とし、鳥羽川に沿って岐阜市粟野地内まで流し、合流させている。

### 2-5-3 三田洞断層帯

三田洞断層は、「岐阜県の活断層」(岐阜県, 1995)では確実度 II、岐阜市彦坂付近から南東へ、三田洞から百々ヶ峰の稜線付近を通して長良川を横切り、芥見まで達する約 13 km の左横ずれ断層である。根尾谷断層系の中では活動度が低く、濃尾地震の際にも活動した記録はない。芥見や古津などに断層破碎帯が確認され、県道バイパストンネル工事記録でも断層破碎帯の存在が示されている。各所に断層による破碎帯や地形のずれが確認されるが、最近の活動の証拠となるものは未だ見いだされていない。



図 2-9 三田洞断層の露頭

「1/25,000 岐阜県活断層図」(岐阜県, 2010)では推定活断層とされ、その位置は百々ヶ峰

<sup>7</sup> 確実度: I 活断層であることが確実なもの、II 活断層であると推定されるもの、III 活断層の可能性はあるが、様々な理由により疑問が残るもの 資料:「新編日本の活断層」(活断層研究会編, 1991年)

<sup>8</sup> 活動度:A 級 平均変位速度 1000 年当たり 1m 以上 10m 未満。 B 級 平均変位速度 1000 年当たり 0.1m 以上 1m 未満。C 級 平均変位速度 1000 年当たり 0.01m 以上 0.1m 未満。 資料:「新編日本の活断層」(活断層研究会編, 1991年)

の南側とされる。しかし、百々ヶ峰の稜線付近にみられる断層破碎帯の位置から約 1km 南側であり、断層の位置には検討が必要である。

図 2-9 に三田洞断層の露頭を示す。

#### 2-5-4 木知原断層帯

木知原断層は、本巣市木知原から岐阜市雛倉へほぼ東北東－西南西に延びる約 4km の右横ずれ断層である。「新編 日本の活断層」(活断層研究会, 1991)では確実度 I 以下、「岐阜県の活断層」(岐阜県, 1995)では確実度 II とされている。直線的な断層谷や明瞭な鞍部が連続し、右横ずれを示す、谷の屈曲も多数見いだされる。この断層の西端は谷汲断層とほぼ同じ位置であるが、谷汲断層とは、走向の向きがやや異なり、横ずれの向きも逆である。

#### 2-6 地形・地質と地名

市内の地名には、河川の氾濫の歴史を感じさせるものがある。

尻毛(しっけ)・・・伊自良川の氾濫原で湿気が多かったため。

日置江(ひきえ)・・・旧木曾川と長良川にはさまれた低地。「ひき」は低いという意味。

水海道(すいかいどう)・・・海道は一区切りの地域という意味で、境川の氾濫によって頻りに水没した地域という意味。

芥見(あくたみ)・・・悪地と同じ意味で、低い土地、低湿地を意味する。長良川、津保川、武儀川の合流部。

洞(ほら)・・・岐阜県では谷地形を洞という。達目洞、掛洞など。